【184】

氏　名(本　籍)	川口喬一(東京都)
学位の種類	博　士(文　学)
学位記番号	博乙第 1,043 号
学位授与年月日	平成 7 年 2 月 28 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	「ユリシーズ」演義

主　査	筑波大学教授	博士(文学)	山形和美
副　査	筑波大学教授	文学博士	中山恒夫
副　査	筑波大学教授		荒木正純
副　査	筑波大学教授		森田　孟

論　文　の　要　旨

本論文は，活版印刷四六版総ページ数528（まえがき，目次9ページ，本文499ページ，あとがき5ページ，索引5ページ）からなる学術論文である。

本論文は，今世紀の世界文学を代表する作家ジェイムズ・ジョイス（1882-1941）の長大な小説『ユリシーズ』(1922年刊）について，出版後70年以上にわたる膨大な『ユリシーズ』批評の歴史を十分に踏まえたうえで，この作品に内蔵されているさまざまなレベルの物語りとその重層的な言語機能を，国内外にわたって今まで措定されることのなかった新たな視点から総体的に捉えることを目的とするものである。

本論文の構成は，まえがき，目次，本文，あとがき，主要人物及び主要項目索引と続くが，本文は『ユリシーズ』全18章の構成に合わせて著者によって独自に工夫された次のような18章からなる－

第1章　マーテロ塔にて
第2章　デイジー校長の学校で
第3章　サンディマウントの浜辺にて
第4章　ブルーム家の朝
第5章　街を行くヘンリー・フラワー
第6章　グラスネヴィン墓地に向けて
第7章　新聞社にて
第8章　昼飯どきのブルーム

第９章　図書館にて
第10章　ダブリンの人びと
第11章　オーモンド・ホテルにて
第12章　キアナンの酒場にて
第13章　ふたたびサンディマウントの浜辺にて
第14章　産院にて
第15章　夜の街にて
第16章　御者溜まりにて
第17章　ふたたびブルーム家にて
第18章　女／性のファンタジー

出版後70年以上を経ても『ユリシーズ』はいまだに今世紀最大の問題作であることに変わりはない。そのため，そのときどきの批評的動向を反映して，あらゆる角度からの作品研究，伝記的研究，本文研究，文献学的研究，さらに最近では新しい視点からのいわゆる〈文化研究〉など，考えうる限りの様式の『ユリシーズ』へのアプローチがすでになされている。だが思ってみれば，その一方では，〈物語り〉（ナラティヴ）としての『ユリシーズ』の本質，すなわち本作品に遍く見え隠れするところの，言葉が織りなす〈物語り〉の饗宴への関心があまりにも蔑ろにされてきた。ここから著者には，『ユリシーズ』批評は〈言葉〉と〈物語り〉を精読することから再出発しなければならないという重い反省が生まれてくる。このような前提のもとに著者は，この複雑きわまりない言語構築物に内包されているさまざまな〈物語り〉をその始源から具体的に解き明かす作業を，作品の流れ（シークエンス）に沿って，全18章を通して行なっている。

まず，本作品の副主人公スティーヴンを中心とした物語りである第１章から第３章までのそれぞれの章のやや伝統的と思われる描写方法の中にも，早くも破格的な語りが現われることが具体的に指摘される。外在的語り手のある種の責任放棄，読者に供せられるべき重要な情報の抑圧，情報仲介者としての語り手の不在などがそれである。

本作品の主人公の午前中の行動が描かれる部分である第４章から第６章までは，一見混沌として取りとめのない主人公の外在的行動，彼の内部意識，彼を取りまく人物群，社会的出来事などが，著者によっていくつもの物語り要素として抽出され，再構成される。特定の情報の断片が主人公の人物像を織りあげる言葉の網の目の一つとしてどのように彼自身の人間的なドラマを構成するかが，断片的情報の用意周到で綿密な回収作業によって説明されているのである。

これまでの章も統一的なテクストに亀裂を生ぜしめるような異質な声が聞こえていたが，著者によれば，第７章で初めて，物語りの中にそれをパロディ化し批判する今一つの声が，テクスト中に埋め込まれた新聞の見出しという形で登場することになる。ここから『ユリシーズ』という作品は一層あからさまに，互いに異質なテクストの混在，つまり伝統的な小説に見られた均質性の破壊という特性を露わにしてくる。例えば第10章の主題は確かにシェイクスピアをめぐる芸術論であるにしても，語

り手はもはや非人称の客観的（オムニシェント）な語り手ではなく，物語りに干渉し，かのヘルメス神さながらにジャンルを越境し，みずからの語りと戯れるところの遊技的な語り手であることが指摘されるのである。

このような語り手のいわば自由な可動性は，作品の中間の章の第10章でさらに顕著なものとなる。ここでは中心人物たちは特権的な視点を剝奪されて，群小人物たちとともに，著者の言う「同時性」と「異所性」の原理によって19の基本的場景に細分化され，人物たちは結節点を失って浮遊して，それを有機的な一編の統一的な〈物語り〉に構成する作業は，もっぱら読者に委ねられることになる。これからのち『ユリシーズ』は決して単一の一元的な原理によって語られることはなくなり，その物語りは同時に競い合う複数の語りの原理によって進行していく。つまり著者の言う〈言語〉と〈物語り〉の饗宴が一層重層化してくるのである。第11章では，あたかも音楽のフーガ形式のように，語る声と出来事とが干渉しあい，絡み合いながら進行し，第12章では，物語りは極度に偏向した「名のない語り手」の目を通して伝えられるが，同時にそこには，あたかもそれを批判し茶化すかのように，実に33ものパロディが語りの中に挿入される。こうして，物語りはますますアンティ・ナレーションに向かうことになる。

このような語りの一元性の積極的な放棄は，つぎの第13章，つまり初夏の夕暮れ，浜辺で瞑想に耽るふたりの人物の描写にも明らかで，ここでは前半は若い女性の内的独白が感傷小説風の特殊なフィルターを通して歪曲され，後半は疲弊した人物の諦観によって文体までもが疲弊してくる。さらに第14章では，今までにも見られた言語の存在主張は一層顕著なものとなり，物語りを語る言語はいよいよ不透明になってくる。文体はつぎつぎに変容し，英語という言語の最初期の文体から始まって，しまいには，今世紀初頭の猥雑・俗悪な口語的な文体の混合体にまで至る。『ユリシーズ』の中間部を締めくくるもっとも長い第15章「夜の街にて」はこのうえない野心的な小説作法の試みであるが，ここでは，語りの方法は一転して演劇形式に取って代わり，スピーチ・ヘッディング，ト書き，科白などが各人物に割り当てられる。しかし語るのは通常の人物だけではなく，幻想の人物のみならず，生物・無生物までもが語る。物語りはリアリズムのレベェルを離れて，幻想の世界の中でも展開する。重要な点は，ト書きまでが，人物の幻想を共有するかのように，中立的な情報提供者ではないということである。

『ユリシーズ』の終結部，つまり最後の３つの章でも，〈言語〉と〈物語り〉の共同作業はさらに特異な展開を見せてくる。第16章では，主人公と副主人公とが初めて二人きりになり，御者溜まりで休息するが，両者の間で交わされる会話は，語り手の饒舌さにもかかわらず，いわば「既製品としての言語の氾濫」であって，言葉は明晰さを失い，伝達の困難さだけが前景化される。つぎの第17章では，二人はブルーム家に到着し，二人の言動は実に309個の問いと答え，すなわち〈教理問答〉によって語られるのであるが，問答によって二人の経験が充足した統合体となるどころか，問答を重ねるたびごとに秩序ある有機的世界はますます遠ざかっていく情況がここでも見られる。出来事の詳細はむろん明らされはするが，人間的ドラマは不明になっていく。そして最終章だが，この章はこれまでのどの章とも似ていない章になっている。女主人公の意識の流れが，句読点なしの1600行にもわたる言

葉の洪水として提示されるのである。問題を孕むこの最終章を著者は，これまで読者が『ユリシーズ』を通して体験してきたことのいわば総括あるいは追体験として捉えるが，それはこれまでの〈言葉〉と〈物語り〉の饗宴へのエピローグとなっている。しかし，それによって『ユリシーズ』の物語り的空白は最終的に埋められることは決してなくて，『ユリシーズ』特有の，積極的な物語り次元の各単位の間の空白と間隙はいぜんとして読者の前に残されるという，きわめて重い，いわば〈開かれた〉結末を提示するのである。

審　査　の　要　旨

上に概括したように，本論文はジェイムズ・ジョイスのきわめて難解な大作『ユリシーズ』について，これまで70年にわたる斯界のほとんどすべての研究成果を視野に収めたうえで，改めてこの作品を〈言語機能〉と〈物語り機構〉の両面から徹底的に読み直し，これまでともすれば批評理論的な作業ばかりに目が向けられてきたあまり蔑ろにされてきた『ユリシーズ』の〈物語り性〉の復権を提唱し，それの実践作業を行ったものである。そのため著者は，原作の構成に即応した全18章の中で，物語りの流れに沿って言語の機能の展開をあとづけ，その都度，各場面に典型的に見られると判断される〈物語り素〉(narrateme) を読み込み，それを各章の小見出しとして掲げて，それをきわめて巧みに分析し，記述し，かつ解説を加えていくという至難の技とも思われてきた作業を丹念に行っている。またその作業の結実そのものが一編の〈作品〉，つまりメタ・テクストになっているということも本論文の重要な積極性として挙げうるのである。

これを言い換えれば，『ユリシーズ』という作品は綿密なテクストのさまざまな照応関係（コレスポンデンスとクロス・レファランス）によって織りあげられた有機的構造体（テクスチュアー）であるという信念のもとに，著者は丹念な解読により数々の物語りを前景化している。だが同時に，この作品には最終的に解釈不可能なアポリアとも言うべき不確定要素が含まれていることをも著者は終始意識しており，かつその情況を巧みに記述しているのである。このような作業は，以上概略説明したような著者の精密な読みの行為をまって初めて可能になったものと判断される。その意味で，本論文は〈物語り〉として『ユリシーズ』の豊穣性，そこに駆使されている言葉の孕む多元的な機能を論証することを第一の目標としていることになる。だが，論証の過程で言及されたり援用されたりしている現在の先鋭な文学の批評理論への豊かな知見，熟達した理解，ならびに先鋭な意識が著者になかったならば，その意識の裏返しとして40年にもわたって著者が培ってきた『ユリシーズ』への終局的ヴィジョンの中核を支える論理は成立しなかったであろうということも，ぜひつけ加えておくべき重要な局面であることを指摘しておきたい。

このように，本論文は，ジョイスの『ユリシーズ』をそれを構成するもっとも基本的な〈言語〉と〈物語り〉の次元で綿密に分析・検証したもので，今となっては不可解とも言うべき，国の内外を問わずついぞ見ることのできなかったこのような論文が，今後の『ユリシーズ』研究の重要な先駆的論文として寄与するところ多大であると判断する。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。